
パロディ童話集

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パロディ童話集

【Nコード】

N4150M

【作者名】

Rail

【あらすじ】

童話のパロディ集。おなじみの童話がなんだか変なんことに？
明るいものからブラックなものまで。

赤頭巾ちゃん

昔々、あるところにとてもかわいらしい女の子がいました。

彼女はいつもおばあさんからもらったお気に入りの赤い頭巾をかぶっていたので、赤頭巾ちゃんと呼ばれていました。

ある時赤頭巾ちゃんは病気のおばあさんのお見舞いのために、ぶどう酒とパンを持っておばあさんの家へと向かいました。

と、そこへ狼がやってきました。

「赤頭巾ちゃん、一体どこへ行くんだい？」

「病気のおばあさんのところへお見舞いに行くの」

そこで狼はおばあさんの家に先回りしようと考えました。そしておばあさんを食べ、さらには赤頭巾ちゃんも食べてしまおうと思ったのです。

「お見舞いの品はなんだい？」

「ぶどう酒とパンよ」

「他にももつとお見舞いを持っていったほうが、おばあさんは喜ぶよ」

狼は優しい声音を作り、言いました。この先にある花畑に赤頭巾ちゃんを連れて行き、足止めをしようと思ったのです。

「そうね。ぶどう酒とパンだけじゃ物足りないわね」

赤頭巾ちゃんは何かを考え込むようにうなずきました。

「そう、あっちに綺麗なお花畑が」

と、狼が言いかけると、

「やっぱり、これだけじゃ栄養がつかないわよね」

しばらくして、おばあさんの家をノックする人がいました。

「おばあさん、お見舞いを持ってきたわ」

「まあ、赤頭巾ちゃん、ありがとう。一体何を持ってきてくれたの？」

赤頭巾ちゃんはにっこりと笑いました。

「ぶどう酒とパンとお肉よ。お肉はちょっと硬いから、今からスープにするわ」

そうして心の籠ったお見舞いのおかげで、おばあさんは元気になりました。そして赤頭巾ちゃんは立派な毛皮を猟師さんに売って、お母さんを喜ばせましたとき。

めでたしめでたし。

白雪姫

昔々、あるところにととても美しいお姫様がいました。

お姫様の名前は白雪。

白雪姫はその名の通り、処女雪のように白い肌を持ち、鮮血のように美しい赤い唇を持ち、黒檀のように黒い髪と瞳を持ったそれはそれは美しいお姫様でした。

しかし天は二物を与えずという言葉通り、白雪姫には多大なる欠点がありました。

豪華で上品な装飾が施された城を、柳眉を逆立てた王妃が歩いていました。

「白雪！ 白雪はどこ！？」

王妃はヒステリックに声を荒げると、何人もの侍女が慌てて彼女の周りに集まりました。

「王妃様、どうか怒りをお静め下さいませ」

侍女達はなだめようとしますが、王妃の顔は一層険しくなるばかりです。

「いいえ、いいえ！ 今度こそは許しはしません！ あの子にはあれほど、あれほどきつく叱ったというのに！ それなのにあの子ときたら、また厨房でつまみ食いをしたのですよ！？ 来賓に出すはずの料理だったというのに！」

口に出してさらに腹が立ってきたのか、王妃の声はだんだん高くなっていきます。

「あの子ももう十三を超えた、世間では立派な淑女になっているはずの年齢なのです！ その上あの子はこの国の王女だと言うのに……！ それなのにあの子と来たら！」

そう。白雪姫は大変食い意地が張っていたのです。

厨房の料理はもとより、庭園の木の実、花の蜜、果ては狩りに出かけて仕留めた獲物を自分で捌き、その場で食すというある意味清しい程の食い意地の張りっぷり。

そういうわけで、ある日とうとう王妃はブチ切れたのです。

「ああ、あんなのが実の娘で、この国の跡継ぎだなんて、恥さらしでしかないわ。それならばいっそ、いなくなってしまった方が都合がいいでしょう」

そう思いつくと王妃は獵師を呼び出しました。

「いいこと？ 白雪を狩りに連れて行きなさい。森の奥の奥まで連れて行くのです」

それを聞いて獵師は震え上がりました。

「まさか、白雪姫を屠って来いとおっしゃるのですか？」

すると王妃はかぶりをふりました。

「いいえ。実の娘にそんなひどいことをする親がいるわけないでしょう。あなたはただ、そうね。採った獲物を料理してあげなさい。そしてそれを白雪が食べている間に城に帰ってくるのです。いくらあの子でも森の奥の奥なら帰ってこれないでしょう」

ぶっちゃけ、捨て子宣言です。

「しかしそれでは白雪姫は……」

「あの子なら大丈夫です。すでに齡が十を数えたころから山に入っては木の実や獲物を採ってきた子です。幸い今は春。絶対に死にません」

いろんな意味でおかしい母親からのお墨付きです。獵師自身も密かにそうだろうと思っていました。口にはしませんでした。沈黙は金です。

「別に一生というわけではありませんよ。一カ月後には隣国の王族の方々がいらっしゃいます。その方々が帰ったら迎えに行きましょう」

つまりは、臭いものには蓋というわけですね。

そういうわけで、その数日後には獵師による白雪姫置き去り大作戦が実行されました。

その時点では誰も、一カ月後なぜか森に捨てたはずの白雪姫が隣国の王子の婚約者として数々の武勇伝と共に現れ、しかもその発表の場で料理を貪り食っていることにショックを受けた王妃が卒倒す

るとは予想だにしていなかったのです。

おそろくめでたしめでたし。

シンデレラ

昔々、あるところにシンデレラと言うそれはそれは可愛らしい女の子がいました。

彼女の母は早くに亡くなり、父親は代わりに新しい女を家に引きこんだのですが、その継母や連れ子たちはシンデレラをいじめたのでした。

シンデレラは貴族の娘でしたが、まるで下女がやるような仕事まですべて押し付けられたのです。

ある時お城の舞踏会が開かれることになったのですが、国中の女の子が招待されたにも関わらず、シンデレラは継母たちによって留守番を言いつけられてしまいました。

女の子という年齢ではないではない継母も張り切って出かけました。

さてドレスもなく、泣く泣く留守番をしていたシンデレラでしたが、そこへ魔法使いがやってきてシンデレラに魔法をかけてくれました。

シンデレラは綺麗なドレス姿に、かぼちゃは馬車に、ネズミはイケメンの御者になりました。

そしてシンデレラはイケメンの御者とかばちやの馬車に乗って愛
の逃避行に出て、幸せに暮らしましたとき。

めでたしめでたし。

ハーメルンの笛吹き男

昔、ハーメルンの町の人々は大変困っていました。町に大量のネズミが発生していたのです。

朝は走り回るネズミの足音に起こされ、昼はのべつ幕無しにネズミに仕事の邪魔をされ、夜眠ろうと寝床に入ればそこでもネズミと顔を合わせるというぐらい。ネコをけしかけようにも多勢に無勢、逆にネズミに襲われる始末。毒入り団子も焼け石に水、ついには町長がネズミ退治に懸賞金を掛けるほどでした。

さて、そんなあるときハーメルンの町に奇妙ないでたちの男がやってきました。

道化師のような格好をした男は、自分ならば町中のネズミを退治してみせると言いました。

「本当だろうか」

「法螺を吹いているんじゃないか？」

「とりあえずやらせてみよう」

町長たちは話し合いをしました。誰一人として男の言い分を信じていませんでしたが、ネズミの害には参っていたので藁にもすがる気持ちで男に頼むことにしました。

「もしあなたがネズミを退治してくれるならば、私たちはあなたにたくさん報酬を支払いましょう。どうか町を救ってください」

男はうなずくと、町の中央広場に向かいました。

広場に立った男は、懷から変わった形の笛を取り出して吹き始めました。

するとどうでしょう。不思議なことに、町中のネズミたちが男の周りに集まり始めたのです。

集まったネズミは一樣に笛の音に耳を傾けていました。

町中のネズミというネズミが集まると、男は笛を吹いたまま歩き始めました。するとネズミたちも大人しく男の後をついて行きます。そしてヴェーザー川までたどりつくと、男は川のほとりで先ほどとは違った音楽を奏でました。ネズミたちはそれを聞くと、次々と川へと飛び込んでいきます。

そして町中を跋扈していたネズミは一匹残らずヴェーザー川でおぼれ死んだのでした。

男は意気揚々と町へと帰りました。そして町長の元へと戻ると、報酬を要求しました。

しかし町長たちは男を見ると、まるでけがらわしいものを見るかのような態度をとりました。

「報酬？ 何のことだ。私はお前のような人間は知らないぞ」

「笛でネズミを連れ出した？ そんなこと出来るわけがないだろう！」

そう、町長たちは男に報酬を払うのが惜しくなったのです。町からネズミが一匹もいなくなった今、自分たちがしらばっくれてしまえば報酬を支払わなくても良いと思ったのです。

男は激怒しました。

「約束が違つたろう！ ネズミを退治すれば報酬を支払うと言ったじゃないか！」

しかし町長たちは男の要求を突っぱね、棒で打ちすえて町の外へと男を追い出してしまいました。

それから一ヶ月後のことです。ハーメルンの町に奇妙な風体をした男が笛を吹きながら現れました。

男の後ろには、まるで夢遊病にでもかかったかのような娘たちがたくさんついてきていました。どの娘も醜く、性格が悪そうな顔をしていました。

男は広場にたどりつくと、それまでとは違った音を奏で始めました。

するとどうでしょう。ハーメルンの町中という町中から、器量よしの娘が集まってきました。娘たちは笛の音に耳を傾けています。

町中の美しい娘が集まると、男は笛を吹いたまま歩き始めました。すると器量よしの娘たちは男の後について行きます。逆に男が連れてきた醜い女たちは誰もついて行こうとしません。

町の男達は必死で娘たちが出て行くのを引きとめようとしたが、娘たちはぼんやりとした顔をするばかりで一向に足を止めません。

「おい、止める！　娘たちをどこに連れていくつもりだ！」

町長が男の前に立ちはだかりました。男は笛を吹くのを止めると、やれやれと首を振りました。

「この娘たちが勝手についてくるだけだ。笛で娘たちを連れ出すなんてできるわけがないだろう？」

そう言うと、男は笛を吹いて再び歩き始めました。

そうしてハーメルンの町からは器量よしの娘がいなくなり、代わりに醜く、性格の悪い娘ばかりが増えたのでした。

いなくなった娘たちはどこへ行ったのかつて？

実はあちこちの町に行っていたのです。

一か月前、ハーメルンの町を追い出された男は各地を回りました。そしてあちこちの町で契約をしたのです。

醜くて性格の悪い娘を連れていき、器量よしの娘を代わりに連れてくる、と。

契約は見事に果たされ、笛吹きの子は莫大な富を得たのでした。

そして娘たちもそれぞれの町で大切にされ、幸せに暮らしたのでした。

めでたしめでたし。

裸の王様

あるところに王様がいました。

その王様は大変オシャレ好きで、あちこちから仕立て人を呼び寄せては新しく自分の服を仕立ててもらうのが日課でした。王様は豪華な服を作らせて着るのが大好きでした。

ある時王様の元に一人の仕立て屋がやってきました。

仕立て屋は王様を騙してお金を巻き上げようとたくらんだのです。

王様の前に出た仕立て屋は、何もない手にさも布を持っているかのように差し出して言いました。

「王様、世界一美しい布を持ってまいりました」

王様は仕立て屋が何も持っていないことに首を傾げました。

仕立て屋は続けます。

「この布は馬鹿には見えない糸から作った馬鹿には見えない布で、このようにとても美しく肌触りがよいのです」

「ふむ。馬鹿には見えぬのか」

「さようでございます」

恭しく答えながら仕立て屋はこう考えていました。

今まで彼が会ってきた貴族や王様は皆見栄っ張りで、自分が馬鹿だと認める人間は一人もいませんでした。きっとこの王様も大臣たちも、馬鹿には見ええないと言われたなら自分が見えないとは決して言わないだろう。そして美しい布と言われたならオシャレ好きな王様ならば、たとえ自分が見えなくとも仕立てるよう命じるだろう、

と。

しばらくは戸惑ったような沈黙があつたのですが、やがて大臣たちは口々に仕立て屋の持つてきた布を褒め始めました。誰も自分が馬鹿だと思いたくなかつたのです。

しかし仕立て屋に誤算がありました。

「ふむ。ならば余には見えぬな」

王様はすっかり自覚のある馬鹿だつたのです。

そして王様は好奇心旺盛な馬鹿でした。

「馬鹿には見えぬと申しておつたが、それはどこまでが馬鹿となるのだ？ 仕事馬鹿にも見えぬのか？ それとも単純に頭が悪いと見えぬのか？ 言葉も喋れぬ幼子には見えぬのか？ 余は物覚えの悪い馬鹿だが、物覚えが悪ければ見えぬのか？ それとも頭の回転か？ そもそも馬鹿に見えぬなら、余が仕立てた服を着たら舞踏会で何人かは余の裸を目にすることになるのではないか？ 貴族は頭の足りない連中も少なくない」

仕立て屋は内心で悲鳴をあげました。まさか王侯貴族で自分を馬鹿だと断言する人間がいるとは、そしてここまで質問できとは思わなかつたのです。

王様は新しいおもちゃを前にした子供のように興味津津の様子です。一国の王様の質問に答えないなどという不敬を、一介の仕立て屋がするわけにはいきません。

その後、しどろもどろになった仕立て屋を怪しんだ大臣たちが問い詰め、彼らの企みは明らかになりました。仕立て屋は捕まり、数日後には処刑されたのでした。

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。無知の知というのは時として詐欺師に勝るときがあるのでした。

めでたしめでたし。

桃太郎

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。
ある日、おばあさんが川へ洗濯へ行くと、川上から大きな桃がど
んぶらっこっこ、どんぶらこっこと流れてきました。

これはきっと神様の贈り物に違いはないと思ったおばあさんはその
桃を持って帰り、おじいさんと一緒に食べることにしました。

桃を食べるとどうしたことが、一口食べるごとにおじいさんもお
ばあさんも少しずつ若返っていきました。

そして桃をすっかり食べ終えたところには、おじいさんもおばあさ
んも若かりし頃の姿に戻っていたのでした。

おじいさんは考えました。

自分はかつて村一番の美丈夫と呼ばれていた男だ。村一番の美女
と言われたおばあさんと結婚したが、おばあさんは性格がよろしく
なく、子宝にも恵まれなかった。きつとおばあさんと結婚したのは
間違いだったに違いない、と。

おばあさんも考えました。

自分はかつて村一番の美女と呼ばれていた女だ。村一番の美丈夫

と言われたおじいさんと結婚したが、おじいさんは甲斐性がなく貧乏で、子宝にも恵まれなかった。きつとおじいさんと結婚したのは間違いだったに違いない、と。

二人は揃って自分たちの結婚を間違いだったと思いましたので、若返ったこともあつて早々に離縁してしまいました。

そして若返った二人はそれぞれ違う町へと出て、自慢の美貌を生かして伴侶を見つけることが出来たのでした。

若返ったおじいさんは若くて気立てのよい娘と結婚することができました。しばらくすると子宝にも恵まれ、玉のような男の子が生まれました。おじいさんはその子供に桃太郎と名付けました。

若返ったおばあさんは若くて甲斐性のある男と結婚することができました。しばらくすると子宝にも恵まれ、玉のような男の子が生まれました。おばあさんもその子供に桃太郎と名付けました。

月日は流れ、二人の桃太郎はそれぞれ強い子供になりました。そして同じ時期に、鬼が島に鬼退治にいききたいと両親に申し出たのでした。

そして二人の桃太郎は餞別としてきび団子を貰い、鬼が島に鬼退治へと出かけたのでした。そして二人とも道中で示し合わせたように犬、猿、雉を家来として連れて行ったのでした。

さてさて、いよいよ鬼が島に降り立った桃太郎は鬼たちに向かって名乗りをあげました。

「我こそは日本一の桃太郎！ お前たちを成敗しに来た！」

「我こそは日本一の桃太郎！ お前たちを成敗しに来た！」

同じ台詞が二か所から聞こえ、鬼たちは驚きました。

驚いたのは桃太郎達も同じです。まさか自分と同じことを名乗る人間がいるなんて思ってもみなかったのですから。

「やいやい、お前は何者だ。日本一の桃太郎とは私のことだ！」

「何を言う偽物が！ 我こそが日本一の桃太郎だ！」

二人の桃太郎は互いに睨みあいます。彼らの家来である犬、猿、雉も睨みあっていました。

「私が本物だ！ 真似をするな！」

「それはこっちの台詞だ！」

二人はしばらく言い争っていました。やがてどちらが本物かを決めるための勝負を始めてしまいました。彼らの家来である犬、猿、雉もどちらが本物の桃太郎の家来であるか証明するために勝負をすることになりました。

二人の桃太郎は強く、実力が拮抗していました。きび団子を食べた家来たちも同様です。

一方鬼が島の鬼たちは桃太郎たちの強さを目の当たりにして震えあがりました。そして自分たちでは到底かなわないと諦めた鬼たちは、二人が勝負をしている間に財宝やら家財をまとめ、すたこらさつさと逃げてしまいました。

そうして桃太郎が気付いた時には鬼が島には鬼の一匹、反物の一つも残っていませんでしたとさ。めでたしめでたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4150m/>

パロディ 童話集

2010年12月14日21時33分発行